

15世紀後半西地中海の都市社会 —アブド・アル＝バースィトの旅—

菊池 忠 純

一、はじめに

ブローデルの地中海世界の叙述¹は魅力的である。フェリペ2世時代すなわち16世紀後半の地中海世界を重層的に我々に提示する。また長期的な変動の中に古代以来の時代の変遷、特に地理的な環境の考察は興味深い。地中海世界は11世紀半ば以前においてはギリシャ系、ユダヤ系、コプト系、イラン系の活動する世界であり、以降はイタリア諸都市の活動が盛んになり、また12世紀前半以降はイベリア半島北東部カタルーニャ地方のカタラン人がバルセロナ等を拠点に活躍する世界となり、ついで彼らは大西洋にも活躍の場を広げていた²。一方7世紀から北アフリカとアンダルシアを支配したイスラム教を奉じる支配者は、次第にその勢力を失っていった。最終的には1492年に、いわゆる「新大陸の発見」とイベリア半島の最後のイスラム政権のナスル朝(バヌー・アル＝アフマル)の滅亡という象徴的な事件が起きた。

本稿は15世紀後半の西地中海世界のありようを具体的に記述しているアブド・アル＝バースィト・アル＝ハナフィーの未刊の年代記の写本のうち、著者の旅(イスラム暦866-71年/西暦1462-67年)の部分を検討することによって、この記録の特徴と当時の西地中海世界を考察する。またイブン・ジュバイルとイブン・バットゥータの旅行記と比較してその特色を指摘する³。

二、著者の生涯と旅程の概要

本稿の対象とする写本の著者は名前をアブー・アル＝マカーリム、ザイン・アッ＝ディーン、アブド・アル＝バースィト・ブヌ・ハリール・ブヌ・シャーヒン・アッ＝ザーヒリー・アル＝ハナフィー (Abū al-Makārim, Zayn al-Dīn, ‘Abd al-Bāsīṭ b. Khalīl b. Shāhīn al-Zāhirī, al-Ḥanafī) といい、名前で判明するように祖父はシャーヒーン、父はハリールであり⁴、彼の父ハリールがナーイブ職にあったとき、現在はトルコ領であるマラティーヤ (Malaṭīyā) でイスラム暦844年ラジャブ月11日土曜日の夜に生まれた。当時この都市はエジプトを都とするマムルーク朝にとって北部の境界地域の重要な都市の一つであった。

後に父ハリールは著者を連れてカイロに行き、次いでマラティーヤに戻り、次に(現在はシリアの)アレppoに移った後(現在はパレスチナの)ヘブロン (al-Khalīl) とエルサレム (Bayt al-Maqdis) と(現在はシリアの)ダマスカスに移った。のち彼を連れてメッカ巡礼を果たし、(現在のパレスチナの)当時の交通の要所のひとつであるカトヤー (Qaṭyā) に戻り、ダマス

カスそしてタラーブルスに移った。タラーブルス⁵には5年間居住した。その後ダマスカスに戻り、カイロに向かった。

従って彼は、父とともに東方イスラーム世界で生活をしていたのであるが、父と離れて866年ラビーウI月15日に、カイロから西方イスラーム世界に旅立ち、東方と西方の両方のイスラーム世界の事情に通じた知識人の一人となるのである。彼は妻をはじめ家族とともに移動していて、彼の年代記の一年の叙述は、日々の出来事が時間の経過に従って記述されている部分とその年に没した人物の伝記記事の二つの部分から成っているが、その両者に彼の個人的な経験や家族の出来事が日記のように挿入されているのである。本稿は、それを綴りあわせて旅の部分を一貫して分析しようとするものである。

まず西方の旅のルートを概括すると（地図参照）、カイロから南下して、上エジプト（Šaʿīd）に向かい、次に戻って後に北上してアレキサンドリア（al-Iskandariya）に移り、そこからチュニス（Tūnis）、ジェルバ島（Jazīrat Jirba）、西のタラーブルス（トリポリ、Ṭarābulus al-Gharb）、カービス（Qābis）、カイラワーン（al-Qayrawān）、そしてチュニスに戻り、そこから、バージャ（Bāja）、コンスタンチヌ（クサンティーナ、Qusanṭīna）、ビジャーヤ（Bijāya）、アルジェ（アル＝ジャザール、al-Jazāʾir）、マーズナー（Māzūnā）、フッワラ城塞（Qalʿat Huwwāra）、アル＝バトハー（al-Baṭḥāʾ）、一度目のトレムセン（ティルムサーン Tilimsān）⁶、ワフラーン（オラン、Wahrān）、二度目のトレムセン、そこからマラガ（Mālaqa）、ヤクシュ（Yaksh）、アル＝ジャーマ（al-Jāma）、グラナダ（Gharnāṭa）、そこからマラガに戻り、ワフラーン、ビジャーヤ、チュニス、西のタラーブルス、ミスラータ（Misuratāh）、バルカ（Barqa）、そして871年ラマダーン月1日アレキサンドリアに到着、ズウル＝カアダ月にカイロに戻った。彼はそこでイスラーム暦920年に没した。一方彼の父は、タラーブルスに居住していたが、873年亡くなり、その地に埋葬された。

三、旅の記述とその背景

三の一：旅立ちの前。タラーブルス時代

前節で触れたように、特にタラーブルスにおいて、父と著者（アブド・アル＝バースィト）が、同居して生活していることから、父と交友関係にある知識人から学問的な影響を受けたことが想像される。著者が10歳代の後半から20歳代の初めという多感な時代を過ごしたタラーブルス時代については、多くの師から様々な分野の知識の教えを受けたことであろうが、歴史書 al-Rawḍ には、欠落部分があるため判明しない。具体的には第1巻は844年から850年までの年代記部分と死亡記事以外は残っていない。第2巻は、865年から868年の年代記部分と死亡記事が伝わっており、851年から864年の終わりまでは失われた。従って859年から864年のタラーブルス滞在の時期はその欠落部分に含まれてしまう。

後述するように、マグリブ地方それにアンダルスへの旅についての彼の詳細な記述を考えると、タラーブルスに居住していた時期についても同様な詳細な記述がなされていたと考えられる。その部分が伝わっていないことは、残念なことであるが、間接的に関連した人物の死亡し

た年次にその人物の伝記情報が記されている情報などから、彼らの生活の一端がうかがえる。

ここでは、次節で検討する旅の記述と内容が関連する情報を纏めてみたい。

859年父はタラーブルスにおいて、20人長となりそこで著作と教授と研究を行なうこととなった。当地は最初の訪問なのでまず当地の裕福な商人のイーサーの館に滞在した。その後タラーブルスの郊外のアル＝ウワイラーティーヤ地区⁷を見下ろす山の上の邸宅に滞在した。次にアル＝バーバーとして知られている夢判断師(mu‘abbir al-aḥlām)のムハンマド・ブヌ・ムハンマド・ブヌ・スライマーン・アル＝アウザーイー・アッ＝ディマシュキーの館に近い前述の山の麓の館に居住した⁸。

父は、マムルーク朝のスルターン・アル＝アシュラフ・イーナール(857/1453年-865/1461年在位)のタラーブルスのナーイブ(859年-863年在職)アル＝アミール・サイフ・アッ＝ディーン・ハージ・イーナール・アル＝ヤシュブキー(866年没)と交遊を深めた⁹。父は20人長職とハージブ・アル＝フッジャーブ職を巡ってシャーズベク・アッ＝サーリミーと競い合った¹⁰。また当地のアミール・タブルハーナのティムラズ・アル＝イーナラーイー・アル＝アシュラフとも交遊を深めた¹¹。863年に次のナーイブに就任したアミールのイヤース・アル＝ムハンマディー・アン＝ナースィリー・アッ＝タウィール(866年まで在職)とも交遊があり、様々なことを議論したと伝えている。

このように著者の父は、マムルーク朝の地方行政組織の有力者と交遊を深めているが、それと同時に当地のシャイフ達やダマスカスやそれ以外の都市から当地に滞在することがあったシャイフ達から様々な領域の学問を学び、様々な知的なネットワークに結びついていたことが窺われる。

著者が教えを受けた人物としては、まず父それに父の師(シャイフ)であるアフマド・ブヌ・ムハンマド・ブヌ・アブドッラー・ブヌ・サアド・ブヌ・ミフラフ・ブヌ・アビー・バクル・アル＝カイシー・アル＝クドシイー、アッ＝ディーリー(867年没)から学んだことが記されている¹²。

また著者は、歴史書の残存している部分で「アッ＝シャイフ・タージュ・アッ＝ディーン・アブドル＝ワッハーブ・ズハラは、現在タラーブルスの法学者でムフティーで説教師(ハティーブ)で彼の父も説教師であった人である。彼は私が教えを受けて、また読誦の教えを受けた師の一人であり、私はタラーブルスのモスクで行われていた彼の講義に出席した。彼は862年には当地におりその後865年かその少し前に私たちがその土地を離れるまでおられた。」¹³とある人物は、アル＝フブラーディー・アッ＝タラーブルスィーとして知られている806年生まれタラーブルスの大マンスーリー・モスクで活躍した著名人である。

また前述した隣人と同一人物と思われるアル＝バーバーとして知られているムハンマド・ブヌ・ムハンマド・スライマーン・アル＝アウザーイー・アッ＝ディマシュキー・アッ＝サーリヒー・アッ＝タラーブルスィーという人物について、「私は法学と夢判断法について彼に度々教えを乞うた。私は彼から多くのことを学び、有益な助言を得た。」と記している¹⁴。

三の二、西地中海の旅の記述と背景

タラーブルスからカイロに向かいそこで著者は一人で西方イスラム世界への旅に出発する。

「865年ジュマダーⅡ月著者は父とともにダマスカスに滞在した後¹⁵、カイロに到着した。父はユースフ・アル＝マリク・アル＝アジーズの姉妹である妻の館に落ち着いた。伝え聞いた友人達は度々彼を訪問した。著名な学者アル＝ブルキーニーが来訪すると、父は著者を引き合わせ、彼の知識と知恵にアル＝ブルキーニーが感心したと伝えている。また父は著者を、アル＝ムアイディーヤ学院で開講していたハナフィー派大法官アフマド・ブヌ・アッ＝ダイリー（ディーリー）のマジュリスに同席させ、法学での遺産の配分問題についての疑問点を質問した。」¹⁶

その間にマグリブに出発する前に、旅で商う商品を買付けに出かけた。ここでも彼の叙述の特徴である具体的な描写が見られる。

866年ラビーウⅠ月15日著者は、カイロから上エジプトに向かい、そこで3ヶ月間にわたりマグリブで商うために亜麻（カッターン）を800ディーナールで買い入れた。カイロに戻り、ついでアレキサンドリアに移動して断食明けの祭日（イードル＝フィトル）（シャウワール月1日）¹⁷を、アッ＝サアディー・モスクの礼拝で迎えた¹⁸。

シャウワール月19日土曜日にアレキサンドリアを出航して¹⁹、33日の航海の後ズウル＝カアダ月22日水曜日にチュニスに入港した。

いよいよマグリブの旅に出立したが、このチュニスの記述に、これ以降出会うことになる彼の叙述の特色の二つが見られる。

一つは著者あるいは著者の父が属していた知識人のネットワークが窺える記述である。

すなわちチュニスで彼を出迎えたのはザイトゥーナ・モスクの教師のシャイフ・アブー・イスハーク・イブラーヒームであった。ここで「著者は、昼から昼過ぎまで、あるいは昼過ぎから刻まで彼の講義に出席して、ファトワの権威者である彼の教えを受けた。」と記している²⁰。

このように訪問した各地で有名な専門家に教えを受けている。所謂知識を求めての旅の側面を示す記述である。

もう一つの特色を示すのは以下のような記述である。

「ズウル＝ヒッジヤ月28日水曜日にフランク人が所有する2隻の船がチュニスの港に入港したが、それぞれ多くの捕虜を乗せていた。著者は小舟に乗って近づいて、2隻のうち大きな船に乗船した。そこで、トルコ語とフランク人の言葉を知っているトルコ人イスラム教徒の捕虜の一人に会った。彼はムバーラクという名前で、約25年間捕虜の身分であって、アラビア語は知らないの、著者はトルコ語で話をした。そこで彼はアル＝ハワージャ・アッ＝タージル（大商人）アブル＝カースィム・アル＝バンユーリー・アフマドというアンダルスのナーズィル（nāẓir al-Andalus）でありチュニスの商人の代表者でその居留者である（‘aẓīm al-tujjār bi-Tūnis wa nazīluha）人物に会って、この捕虜のことを彼に知らせ、彼の仲介で、フランク人から40ディーナールでその捕虜を解放して上陸させて後、彼を雇い何年もの間同行させた。」²¹

ここには彼の旅の叙述の横糸とでも言えそうな彼を巡る個人的な「物語」が語られている。彼はマラティーヤ生まれということもあり、トルコ語の知識があったことは彼の著作から窺わ

れる。従ってこの捕虜に同情するとともに彼を自分のマムルークとすることになったことは想像できる。彼の旅行の様子は年代記的な枠組みの中に日付順に記されているので、この人物をめぐるその後の事件の経緯が分かりにくくなっている。それが不思議さを増してあたかも虚構のような印象を与えることになっている。

ここでは旅の叙述を旅程順ではなく、彼と著者との関わりと経緯を辿ってみる。後述するように著者はチュニスから東に向かい、西のタラーブルスに到着する。ここで彼と領主（qāid）アブン＝ナスルとの関係が悪化するのであるがその原因の一つはこの「トルコ人イスラム教徒」ムバーラクの行為であった。

著者は、約九ヶ月後867年ラマダーン月15日に西のタラーブルスに到着して滞在することになった。「そこで彼は10人の黒人の奴隷女を購入したが、バイルートの沿岸ではより高値で売却できると主張するマムルーク（白人奴隷）に彼女達を任せて取引に向かわせた。」このマムルークについて「著者がチュニスで購入した男で出身はサルディニーア（サルディニア島）で、捕虜となりイスラムに改宗して（原文のママ）いた人物で、彼を（捕虜の身分から）解放して信頼をおいていたのであるが、実際は彼を騙していた。」と記述する。以前彼を叙述したのはとは違う表現であるが内容から同一人物と考えられる。著者は、そのマムルークを信頼して、商人達とともにヴェニスの船団に同行させバイルートに向かわせた。「しばらく後にそのマムルークがロードス島に行き、そこで奴隷を売却するとともに、棄教してサルディニーア島に向かったという知らせがもたらされた。」かねてからこの地の総督と著者の関係は良好でなかったが、総督はこの機会に彼から金を巻き上げようと計画して、「彼に使いを送り女奴隷達について質問した。著者は、バイルートに彼女達を送り、売却したと答えたところ、その総督はお前は彼女達をロードス島に送りそこで売却したのではないかと反駁した。著者はもし万一そのようなことがあれば、イスラム教徒の国庫（bayt māl al-muslimīn）に1000ディーナール納めると誓約した。」「その後すぐに2度目に総督のもとに伺候させられた。それは既に以前ロードス島にいたイスラム教徒の二人の捕虜がもうすぐ到着することになっており、件のマムルークが行ったことを知らせ彼の様子を詳しく述べることになっている。従って噂が本当であればどのように弁済するのかと問い、もし情報が真実であれば1000ディーナールの支払いを履行するという公的な報告書（マフダル）を書かせた。」²²

キリスト教徒が支配する場所における商売の規制の一端が窺われる記事であるが、その詳細については述べられてはいない。「868年ムハッラム月15日木曜日西のタラーブルスに、1隻の小舟が到着したが、そこにはロードス島から逃れてきたムスリムの2人の捕虜が乗船しており、その領主にそのマムルークがなしたことを知らせた。」このように領主は真実を知ったが、彼ら2人に「そのマムルークがイスラーム教から棄教したことには触れないことを約束させた」。一方で総督は、「著者に1000ディーナールを要求し、物事を整理する機会を与えず彼を捕えることを命じ、彼の館に手下（ジャマーア）を使わし、彼らは、館で見つかった商品のすべてを取り上げ、彼の妻を彼のもとに連行した。著者はその夜を牢で明かした。」一方「タラーブルスの名士達は、事件の経緯を知ると、総督の元に向かい、非難の声を上げた。というのも、すでに法官のもとにはそのマムルークが棄教したという知らせが届いており、彼は法が

すべきことに取りかかり、総督に以下のことを述べた。すなわち金額を支払う条項は有効でない。それは件のマムルークが棄教して、その所有者を欺き巧妙に騙し彼の資金を持って逃亡したからであると。そこで総督は翌日彼を釈放することを約束した。」翌朝著者は釈放されたが、その前に総督に詳細は公言しないようにと約束させられたので、それまで著者の世話をしてくれたタラーブルスの大商人であるアブドル＝ハミード・アル＝アッワーディーとの交友関係も断絶した。「著者のもとにハリール・アル＝アジャミーというサマルカンド（出身）の機知に富んだ者がいたが、彼は経緯をよく知っており、友人に敵対する大商人の様子に衝撃を受けて、著者に成り代わったような詩を作った。」

「何日後、ビザンツのロードス島（Rūdus al-Arwām）から逃れてきたムスリムの捕虜 10 人以上が小舟で（西のタラーブルスに）到着して、真実を知らせた。すなわちこのマムルークはキリスト教信仰を保持しており、人々に自分が主人に行なったことを吹聴して、500 ディーナールで奴隷女達を売却したことを述べていることや、ヴェニス（ヴェネツィア）のシャワーニー船がロードス島に入港してきたとき、フランク人の船長（サーヒブ・アル＝マルカブ）を騙し、自分の主人（すなわち著者のこと）は、彼がロードス島で奴隷女とともに下船して、そこから、シリアの沿岸よりも価格が高騰していることからルーム人の土地に向かって旅をして彼女達を売却するように命じたと述べた。船には彼に同行して一人のユダヤ人がいて、彼は彼から彼女達を購入することに同意して、彼のために船賃を支払った。船主のフランク人は彼の言葉に騙された。

この話がタラーブルスに流布し著者はその正しさを確信したとき、彼は領主のもとに行き彼に彼が取り上げた物の返却を求め以下のように警告した、すなわちチュニスに戻りその領主（サーヒブ ṣāḥib）のウスマーン²³と息子アル＝マスウード²⁴に不満を訴え、彼が彼の金と邸宅を返却するまでは彼のもとから立ち去らないとした。そして彼自身は奴隷女達を失い牢に入れられたことを申し述べると。」²⁵

このように、物語風の叙述が続くのであるが職名やハフス朝スルターンなどの経緯から、事実を具体的に述べていると言えよう。

さて、彼のチュニス滞在時に戻り、旅程に従って彼の叙述を追うことにする。「867年サファル月26日水曜日に、著者にアッ＝シャイフ・シュクルバーイの母との間にアーイシャという娘が生まれたが、その日のうちに亡くなった。彼は子供を望んでいたので深く悲しみ、チュニスの大きな墓場であるアッ＝ザッラージュという場所に埋葬した。」²⁶

翌日27日木曜日の記述には、彼を慰めるためにアンダルス出身でチュニスの人イブン・アッ＝ラジーン・アル＝ハズラジーとして知られているアブー・アブドッラー・ムハンマド・ブヌ・ムハンマドそれにムハンマド・アル＝ハディーディー、アフマド・アル＝ワルドゥーニー、シュアイブ・アル＝バジャーイーという3人がアッ＝ザッラージュ門からチュニスの郊外に出かけ、一緒に歩いて彼の悲しみを癒そうとしている様子がその際に作られた詩とともに叙述されている²⁷。

29日土曜日チュニスの領主で（ハフス朝）後継支配者のムハンマド・アル＝マスウード・ビッラーヒ・ブヌ・アル＝ムタワッキル・アラッラーフ・ウスマーンの使者が到着して伺候す

るようにと求めた。会見の場で作った彼を讃える詩を気に入り、税や負債を免除する書き付けを発行した。その後著者は、度々彼のもとに伺候して、同席したその町のシャイフと会見することになった²⁸。

約六ヶ月間チュニスに滞在した後、ラマダーン月2日には著者は、商人達とともに何隻かの船でジェルバ島に到着して、8日間その沿岸に滞在した。彼らは、油と各種の衣類を積み込み、東に向かい西のタラブルスを目指して出帆し、ラマダーン月15日木曜日の昼に上陸した。大商人（カビールッ=トッジャー）アブドル=ハミード・アル=アウワーディーが彼のために住む場所を用意してくれた。この町では彼は当地の法官で説教師でムフティーのマンスール・アル=バンジャリーリー・アル=カルウィーと会見した。彼はカイラワーンの近郊にあるバンジャリール村の出身で知識人で有徳の人物であった²⁹。

またこの西のタラブルスに滞在している間に商人達の彼の仲間とともに散策に出かけ、チュニスの領主スルターン・アブー・ファールス・アブドル=アジーズ³⁰の息子アブー・アブドッラフ・ムハンマド³¹が建設した修道場（ザーウィア）を訪問して庭園とそこにある宮殿を見物した³²。

著者が旅をした時代はチュニスを中心としたハフス朝の最盛期のスルターン・アブー・ファールス・アブドル=アジーズの時代から少し後の時代であったが、イブン・ハルドゥーン³³に代表されるようなスペインからのムスリムの移民を受け入れ、チュニスがマグリブにおいて美術的にも知的にも中心的役割を果たしていた時代の名残を色濃く残していたことを示す記述が見られる。また既に東方イスラム世界に流行していたマドラサを中心とした教育システムを西方イスラム世界に13世紀に導入したのはこの王朝時代であった。そのような背景を考えると興味深い記述が続く。宿舎の手配や商品の仕入れなど商人のネットワークと知識人のネットワークが重なっている様子がやはり具体的な地位と個人名を揚げながら叙述されている。

ズウル=カアダ月2日火曜日に著者は病気になったが翌日には前述の法官アル=バンジャリーリーがムハンマドという医師を伴って見舞った³⁴。当時西のタラブルスの領主（カーイド qā'id）アブン=ナスルについては著者のマムルークに関連して前述したが、彼はチュニスの領主（ハフス朝スルターン）の代理として統治していたが、彼は暴君であると噂されていたので、著者は彼を訪問しなかったが、その領主は彼を困らせようとして良質の羊毛の織物を要求してきた。そこで彼はチュニスで28ディーナールで購入した長さ40ズィラーアの織物を差し出したが、彼はそれを代金を支払うことなく取り上げた。何日か過ぎて、やはり法官アル=バンジャリーリーが仲介して、その織物を取り戻し著者に返却した³⁵。

その後著者のマムルークの事件を口実にした領主との反目の叙述が続くのである。868年アル=ムハッラム月の下旬領主の息子の一人が死に、領主は悲しんだがそれについて著者は「神は彼の悲しみをより増した」と記すのみである³⁶。

また別の話がこの西のタラブルス滞在に関連して述べられている。彼のマムルークの事件とともにこの元ユダヤ教徒の話はもう一つの旅の横糸とでも言えるもので、この二つの彼の個

人的な話が西のタラーブルスを結節点として展開されているので、最初この叙述を読んだときにはあたかも小説のように纏められていることに違和感を抱いたものである。

この話については旅の最後に関連することなので後述する。

著者は、868年ジュマダーⅡ月チュニスへ戻ることにした。タラーブルスの領主はこれを知り（ハフス朝の）スルターンに彼のことを告げるのではないかと恐れ、口止めのため贈り物を贈って来た、著者は受け取りを控えていたが、贈り物を受け取るまでそういう状況が続いたと記述する³⁷。

ジュマダーⅡ月25日日曜日カービス（Qābis）の町に入りその後28日水曜日にカイラワーン（al-Qayrawān）に入ったところ、イブン・アル＝バクシュとして知られている当地の学者でムフティーで説教師のアブー・アブドッラーフ・ムハンマド・ブヌ・ムハンマド・ブヌ・ムハンマド・アル＝バルディーが彼を彼の邸宅近くの邸宅に住まわせ、彼を厚遇した。著者は彼の講義に頻繁に参加して、努力したこともあり短期間で多くの知識を彼から得て、医学の療法（*ṣināʿat al-ṭibb*）の精選された部分を彼から伝授され、数多くの重要で有益な教えを受け、教授免許証を獲得した³⁸。またカイラワーン滞在中には当地の墓地（ジャッバーナ）を訪ね、学者達や信仰深い人々や聖者の墓の間を彷徨い、多くの名前を書き付けたが、そのノートを失ったので、思い浮かぶのはただイマーム・サフヌーンやアブル＝ハサン・アル＝カービスィーやシュクウーンの墓のみであったと記している³⁹。

（約四ヵ月後、すなわちラマダーン月（断食月）をカイラワーンで過ごした後、）868年シャウワール月20日にはカイラワーンを出発してチュニスに向かい23日の夕方に到着したが、数日のみ滞在してシャウワール月の下旬には、トレムセンへ向かう隊商（ラクブ）に同行して出発した⁴⁰。チュニスから⁴¹隊商の長（シャイフル＝ラクブ）ムハンマド・ブヌ・アビー・イブラーヒーム・アル＝フィーラーニーに同行してバージャ（Bāja）に入ったが、旅の間彼は痛みに耐えていた⁴²。

（約三週間後の）ズウル＝カアダ月17日コンスタンチヌ（Qusantīna）に到着したが、3日間滞在して次いでビジャーヤ（Bijāya）の町に入り、急いでその地のシャイフのイマーム・アーリム・アブル＝カーシム・ムハンマド・アル＝マシュダリーに会いに行き彼から数多くの有益なことを聞いた。ビジャーヤからアルジェ（al-Jazāʾir）に移り、サイイディー・アブドッ＝ラフマーン・アッ＝サアラビーの講義に出席し多くの有益なことを聞き、彼にとって難解であった幾つかの部分の質問をして、彼から多くを教えられ、彼のコーラン解釈書を見て一部を読みその結果終了証明書を得た。アルジェからはマーズナー（Māzūnā）の町次いでフッワラ城塞（Qalʿat Huwwāra）次いでアル＝バタハー（al-Baṭahāʾ）を旅してズウル＝カアダ月下旬にトレムセン（Tilimsān）に到着した。

（到着して約二週間後）そこで868年ズウル＝ヒッジヤ月14日水曜日の出の頃娘が誕生した、母はアル＝ファトヒの母でもあるシュクルバーイで、名前はアーイシャとした。著者は大いに喜び自らその子の教育に携わり、生活の様々な事柄に注意を払いそれはカイロに戻るまで続いたのであったが、873年ラマダーン月15日の夜流行していた黒死病のために亡くなった⁴³。

一年一〇ヵ月前のチュニスでの子供を失った記事につながる子供誕生の記述である。商売をしながら家族を伴って学問の旅を続けている様子がよくわかる記述である。家族について本稿では直接関連する部分のみ触れることにするが、歴史書のこの部分では著者はカイロにいる著者の父に関連して著者の兄弟についての情報を纏めている。

翌月869年アル＝ムハッラム月5日に、彼はトレムセンの郊外に出かけアッ＝シャイフ・アブー・マドヤン・シュアイブ・アル＝イシュビーリーの墓を訪ねた後、ウッバード・モスク (jāmi‘ al-‘Ubbād) の説教師の息子のアブー・アブドッラーフ・ムハンマドと会ってその後六ヶ月にわたり彼の説教を聞き彼の講義に度々出席して有益な教えを受けた、彼はトレムセンの最も偉大な学者であった。また彼が会った学者には、アブー・アブドッラー・ムハンマド・アル＝ウクバーニー、彼の兄弟でトレムセンの大モスクの説教師でイマームのアブー・サーリム・イブラーヒーム、ムハンマド・ブヌ・マルズーク、トレムセンのムフティーのムハンマド・ブヌ・ザカリーヤ、グラナダ (Gharnāṭa) の法官でアンダルシア (al-Andalus) の学者であるアル＝ティムルサーニーの親戚であるヤフヤー・ブヌ・アビル＝ファトヒ、それに彼ら以外の有徳者や教養人がいた。またサイイディー・アリー・ブヌ・カシュージュをはじめとする医師達とも会い、著者は彼等から有益なことを学び、彼らの講義に出席して多くの知識を伝授されるとともに、彼らは彼に教授免許証を与えた。彼は医学においてムーサー・ブヌ・サムウィール・ブヌ・ヤフダー・アル＝イスラーイーリー・アル＝マーラキー・アル＝アンダルスィー・アル＝ヤフディーは、彼の父の名前サムウィールで知られている医術を行なうものであったが、著者は医学の技術や古代からの諸学問 (‘ilm al-wafq wa-l-mīqāt wa ba‘ḍ-l-‘ulūm-l-qadīma) の知識において彼に匹敵するような人物は見聞きしたことがないと述べている⁴⁴。

アブド・アル＝ワーディド朝 (ザイヤーン朝またジヤーン朝と呼ばれる) の中心地であるトレムセンの当時の著名人が記されているとともに、彼が修行を目指した分野の一つである医学について、ユダヤ教徒と思われる医師達の存在と彼らが保持して来た知的伝統を示す記述を残している。

(約三ヵ月後) ラビーウII月27日日没頃彼はオラン (Wahrān) に到着してシーディー・イブラーヒーム・アッ＝ターズィーの修道場 (ザーウィア) を訪問した。またオランのムフティーであるアブル＝アッバース・アフマド・ブヌ・アッバース・アル＝マーリキーに会うとともに当地の知識人や有徳の人士の有力者と交遊を結んだ⁴⁵。

(約六ヵ月後) 著者はオランを離れトレムセンに戻り、869年ラマダーン月17日に到着した。その地の財務官 (ṣāhib al-ashgāl)⁴⁶ のアブドッ＝ラフマーン・ブヌ・アン＝ナッジャールのもとに滞在した。また彼は当地のスルターン・イブン・アビー・サービトの相談役 (muddabir al-mamlaka) でもあった。彼はこの人物と彼の二人の息子、兄アブドッ＝ラーフと弟アブドル＝ワーヒドと親交を結んだ。著者はトレムセンの領主をほめ讃える詩を作るように求められたので、約40対句のカスィーダを作り、書き送ったところ、好評を博し、領主のもとに召された。領主は著者に感謝の念を表し、彼のために指令書 (ṣahīr) を発行した。そこには、彼が行なう様々な商業行為を許可し、トレムセン滞在中の家屋を与え、肉と小麦その他の穀類か

らなる食料を割当てることが記してあった。その後彼はカスィーダの難しい部分を質問されたが、それに明確に答えて、話しが弾んだ。領主は能書家の一人にそのカスィーダを清書させ、声の美しい者にラマダーン明けの祭り（イードル＝フィトル）のときに、領主とチュニスの領主の大使（カーシド qāṣid）臨席のもとでそれを詠むように命じた。ラマダーン明けの祭りの初日（シャウワール月 1 日）ティムルサーンの相談役（mudabbir）イブン・アン＝ナッジャーは、そのカスィーダがトレムセンの領主のスルターンとチュニスの領主の大使の御前で披露され、スルターンの宮殿に伺候した多くの人々が聞き、カスィーダの作者を賞賛したと、著者に伝えてくれた⁴⁷。

著者は、（オランから）トレムセンに戻る際には、次にはファース（フェズ Fās）に向かいその町を訪ねようと決心していたが、当時その地のスルターンのアブドル＝ハック・アル＝マリーニーがユダヤ人を殺害した後に起きた騒乱と不幸な出来事で混乱していることを知って、当初沿岸沿いに向かおうとしていたアル＝アンダルスで商うために、トレムセンで商品を仕入れた後オランに戻った⁴⁸。

トレムセンからオランそしてトレムセンそれに図らずもオランに戻るようになった状況が述べられた部分であるが、最初のトレムセンとオラン滞在中は、モスクの説教師や医師などに会見しているのと比較すると二度目のトレムセン滞在の際には政治的な権力者との関係が描かれている。当時のファース、トレムセン、チュニス、それぞれマリーン朝やワッタース朝、アブド・アル＝ワーディド朝、ハフス朝の中心都市であるが、その政治状況が窺われる稀有な叙述である。まず著者がラマダーン月にトレムセンに戻っているのは、トレムセンで最初に訪れる予定であった権力者が不在あるいは政務に忙殺されていたが、ラマダーン月そして重要な宗教行事である祭りの際には接触できるという目論見があったと考えられる。著者の父ハリールはマムルーク朝スルターンのもとで、ワズィール（宰相）職に就いたことがある。当時のワズィール職はかつてのような重要な職務ではなかったが、著者はワズィールの息子（Ibn al-Wazīr）と呼ばれることもあった。従って各地の政治的な有力者との会見は容易であったと思われる。二度目のトレムセン滞在の際、重要な職である財務官の世話になっていることもこのような背景を考えると納得できる。

「ファースのスルターンのアブドル＝ハック・アル＝マリーニー」とは、アブド・アル＝ワーディド朝の後ろ盾で 823 年（西暦 1420 年）から支配者であったが、この 869 年（西暦 1465 年）には権力を失ったマリーン朝の最後のスルターン ‘Abd al-Ḥaqq II b. ‘Uthmān III である。しかし「当地のスルターン・イブン・アビー・サービト」にあたる人物は同定できない。アブド・アル＝ワーディド朝の支配者は 866 / 1462 年から 873 / 1469 年までは Muḥammad V b. Muḥammad, Abū ‘Abdallāh al-Mutawakkil であり 873 / 1469 年に短命な政権 Abū Tāshufin b. Muḥammad V を挟んで次のスルターンにアル＝サービティー al-Thābitī という名前が見られるのでその関連が考えられる⁴⁹。彼が旅をしたトレムセンは当時混乱していたファースに近く、この事件が象徴しているように、それぞれの王朝が西方地中海世界のキリスト教勢力を巻き込みながら対立また共存していたが、その均衡が崩壊するちょうどその時期であった。従って陸路でファース経由アル＝アンダルスという当初の計画を変

更して、オランに戻ったのである

(約三ヵ月後) 870年アル＝ムハッラム月には、彼はオランの沿岸にある アッ＝サフラ (al-Šakhra) に到着して、同月15日には、ジェノヴァの大きな船でアル＝アンダルスやトレムセンやオランの商人集団とともに海路アル＝アンダルスの地に旅立った。彼の妻は、オランのバイタール・モスクのイブン・アル＝カサル・アッ＝ティムルサーニーとして知られている長老 (シャイフ) で礼拝の指導者 (イマーム) で彼の家系に相応しい生涯をおくったアブー・アブドッラーフ・ムハンマドの居宅に預けられた⁵⁰。

オランからは商人の集団とともに海を渡りアル＝アンダルスに向かったのだが、妻と小さな娘はオランのモスクのイマームに預けている。西地中海地域の不穏な情勢を考えての配慮だと考えられる。

(八日後) ムハッラム月23日金曜日に著者は、アル＝アンダルスのマラガ (マールカ Mālaqa) の町に到着して、当時の北アフリカ (マグリブ) の有名な知識人であるアンダルスの長老 (シャイフ) でグラナダ (Gharnāṭa) の法官 (qadī al-jamā'a) であるシャイフ・アブル＝アッバース・アフマド・アッ＝ティムルサーニーと会見して、有益なことを聞いた。またマラガの法官で説教師であるアブー・アブドッラーフ・ムハンマド・ブヌ・アッ＝タルアとも会い、彼がその注釈をしているので、シャイフ・ハリール・アル＝マーリキーの伝記情報を尋ねた。著者が (父の師の) アル＝ハーフィズ・イブン・アル＝ハジャールを通じての情報を知らせると、このマラガの法官は喜んだ。著者は彼の講義に出席して有益なこと特にアラビア語 (文法学) の素晴らしさを学んだ⁵¹。

マラガにおいても、この旅の目的の一つである学問の旅の側面が活写されている。またこの叙述で興味深いのは、彼が父を通じて得た東方イスラーム世界で著名なイブン・アル＝ハジャールの伝えていることを教えている部分である。このように人が移動することにより有力な学者の考えが具体的に伝達されている様子がうかがえることである。

「日曜日に海の門 (バーブル＝バフル) にいたとき、フランク人の地のアル＝クンド (bilād al-Kund) に逃亡した者についての噂を聞いたが、その人物は争いの後相手を殺害したこと、また非イスラム教徒の土地 (戦いの世界 dār al-ḥarb) に到着してポルトガルのフランク人 (Furanj al-Burṭqāl) の保護のもとに入ったこと、また後にこの人物は著者に不実をはたらいた件の彼の以前のマムルークであることを知った。」⁵²

同じマラガにおいて、前述した西のタラブルスで関わって入牢することになった件のマムルークの後日談が語られている。境界地域での人の移動の一つの側面を示している。

(一週間後) 「サファル月著者はロバに乗ってマラガからグラナダに向かって旅立ち、ヤクシュ (Yaksh) と呼ばれる小さな村を通過してアル＝ジャーマ (al-Jāma) 村で夜を過ごし、グラナダに到着した。そこで知識人や有徳者達に出会ったが、その一人にアブー・アブドッラーフ・ムハンマド・ブヌ・マンズールがいて、彼は彼の集まりに何度も出席して、数多くの有益なことを聞いた⁵³。

870年サファル月29日にグラナダの領主 (ṣāhib) アル＝アミール・アブル＝ハサン⁵⁴ が使いを遣わしトレムセンの領主とチュニスの領主の情報を求めて来たので、アミールの館

(dār al-imāra) に登城した。彼はその問いに答え、アミールはまたシリアとその情勢それにカイロとその王（マリク）について尋ねたが、彼はその全てに答えた。領主は聞いたことに魅了され、紙をとり、そこに自らの手で、著者に商売に関わる義務の（税）免除を約束して限りなく親切に扱った。」⁵⁵

これまで幾つかの都市で著者が享受した商売上の特権をこのグラナダにおいても、ナスル朝の領主に北アフリカや東方イスラーム世界の政治状況を報告する見返りに得ていることが分かる。

「ラビーウ I 月 10 日著者は、アル＝バヤズィーンとして知られているグラナダの郊外を訪問して大モスクを見物した。次にコルドヴァ (Qurṭuba) を訪問しようとして出発する予定にしていたがグラナダのアル＝カヒール小路 (Zanaqa-l-Kaḥīl) で剣で斬りつけられるという予期しないことが起きた。彼は上唇と口と左頬を傷つけられ、8本の歯が折られた。彼は死の瀬戸際にあったが、ひと月近く治療を受け唇は快復し傷は縫われた。彼を襲った加害者はアブドゥ＝ラフマーンという著者が西のタラーブルスに滞在していた時彼に仕えていて、息子を彼が世話することになったあのユダヤ人であった。彼もグラナダに滞在して、医学の知識を吹聴し、その地の知識人や住民を見下すようになった。住民は彼の能力を疑うようになった。何日後に著者がグラナダに到着した時彼について問われたが、彼は長期間彼のことを聞いておらず彼がグラナダにいることも予期していなかったので答えることができなかった。著者にその人物のことが詳細に描写されたとき、その人物が彼であることを知った。そこで彼は彼らに警告して、彼が狡猾でありイスラーム教徒と偽る偽善者であると知らせた。そのユダヤ人も著者（がグラナダに来たこと）に気付き、狭い街路で待ち伏せして首を切ろうと剣で襲ったが、失敗した。著者も一撃の衝撃で倒れたので、ユダヤ人は彼が死んだと思いその場を離れた。しばらくして彼が傷から快復したことを知り彼が名指しすれば安全でないと考え、彼は背教してフランク人の地に逃れた。後に、フランク人のもとにいたムスリムの一人の捕虜が、著者を知らず会ったこともなかったが、このユダヤ人の不名誉な行為を知って彼を捕え殺害したと伝えられた。その捕虜は自らムスリムの地に逃亡した。」⁵⁶

この事件は前述した彼の旅の叙述のもう一つの横糸である。やはり結節点は西のタラーブルスである。著者の叙述をより明快にするために、省略した868年サファル月の西のタラーブルスの記述に以下の部分がある。

「フランク人の土地からやって来た元ユダヤ教徒のアブドゥ＝ラフマーンという人物に関連したことである。彼は西のタラーブルスに到着してユダヤ教徒地区で、ある女性と結婚して子供を授かることを望んだ。その後彼はカイロそしてエルサレムに旅をした。彼はそこでイスラーム教徒の女性と結ばれ彼は不承不承イスラーム教に改宗した。彼は著者が滞在していたときタラーブルスに戻って来て著者の厚意を求めることに努め遂にはユダヤ教徒の女から彼の息子を取り戻すことに成功した。彼は彼をマグリブの果てまでの旅の同行させ彼にこれ以上はないほど親切を尽くした。このことは868年サファル月であったが⁵⁷、そのユダヤ人は荒廃に導く悪行以外のものを彼に齎さなかった。」

ここで著者に害を与えたという顛末が870年ラビーウ I 月のこの傷害事件であった。

(約四ヵ月後) 著者は傷が癒えて後870年ジュマダーⅡ月下旬にグラナダからマラガに戻った。(翌月) ラジャブ月1日月曜日オランに向かう船に乗りラジャブ月4日に到着した。続いて(すぐに) チュニスに旅立つ予定であったが疲れていて、仲間達にオランで休息し滞在するようにと勧められたので、滞在することにした⁵⁸。

「ラジャブ月14日トレムセン王国の相談役(mudabbir)であるイブン・アン＝ナッジャールとして知られているアブドゥ＝ラフマーンの代理として息子アブドゥラーフ・ブヌ・アブドゥ＝ラフマーンが著者を訪問して、挨拶してかれに起きた事に遺憾の意を表しオランの税関長(mushrif)に彼を優遇するようにとの指令を出した。」⁵⁹

10ヵ月ほど前に彼をトレムセンでスルターンに紹介した人物の息子がオランに著者を見舞いに来るとともに、トレムセンで彼が享受した商業面での特権と同様なことを、オランの関係者に指示していることを示している部分である。

(約7ヵ月後)「871年サファル月29日ジェノヴァのフランク人の大きなシューナ船が地中海から布地(al-jūkh)の取引の名目でオランの沿岸に到着した。(翌月)ラビーウ1月11日著者は、チュニスに向かって出航し、ビジャーヤを経由して、妻と家族と合流した。同月20日チュニス港に到着したが、船に残り上陸せず四日後船は西のタラブルスに向かって出帆した⁶⁰。

(約一ヵ月後) ジュマダーⅠ月上旬に西のタラブルスの港に入港して、暫くそこに滞在した⁶¹。そこでは(メッカへの)巡礼団が準備されていた。著者は(約三ヶ月後) シャアバーン月にムスラータ(Musrātah) 経由のバルカ道を辿るキャラバンに同行して出発し、(翌月) ラマダーン月の新月の日曜日の夜にアレキサンドリアに到着した⁶²。

その後彼は(約二ヵ月後) ズウル＝カアダ月7日カイロに到着したが、既に彼の父は巡礼のためにカイロから出発していた事を知った。」⁶³

このようにして彼のマグリブ、アル＝アンダルスへの旅は終わり、その後カイロで活躍するとともに、著作を行なったのである。

四、おわりに

以上旅の部分进行分析して来たが、ここでその特色をまとめてみたい。西暦1187年グラナダを出発したイブン・ジュバイル(1145-1217年)は、セウタからジェノヴァ船で地中海をアレキサンドリアまで航海した。イブン・バットゥータ(1304-1368/9年)は、1331/2年シリア海岸ラタキアからジェノヴァ船、チュニスからはカタラーン人の船で旅をした。アブド・アル＝バースィトは彼自身が乗った船については記していないが、記述にはフランク人の所有する船、ヴェニス人の船、ジェノヴァ船等が見られ地中海をイタリア諸都市の船が回遊していたことがわかる。イブン・ジュバイルは、13世紀後半から14世紀半ばにかけてイブン・バットゥータに代表されるアル＝アンダルスとマグリブに見られた巡礼者の増加を反映した巡礼紀行文学のさきがけである。この後者の時代からさらに100年以上経ったアブド・アル＝バースィトの記述には当時の西地中海においてキリスト教徒勢力が強大化している一方、マグリブ地方のイスラム教徒の諸王朝下の社会の退潮がより鮮明に見られる。

彼の各都市での旅の様子を検討すると、域内の政治的なネットワークと知識人のネットワークそれらに重層的に絡み合った商業のネットワークの上を動いていることが分かる。これはそれに先行する13世紀後半から14世紀半ばに形成された東方イスラーム世界との密接な交流の繋がりの中で発達したものである。

具体的には、商業の面では各地で課される税とその税が免除される状況や、著者の学問の旅の側面を見ると、様々な分野で師とする先生からのイジャーズ（教授免許証）の授与の経緯、また彼の師の名前を検討すると出身地、法学派、ユダヤ教徒、キリスト教徒であるかどうかなど様々な情報を得ることができる。

イブン・バットゥータの旅の叙述の中で、私の言い方でいうと横糸の一つは、アレキサンドリアでの禁欲主義の指導者の予見すなわち、彼の門弟三人にそれぞれインド、シンド、シナで会うであろうという言葉、それにエジプト・デルタのファウワの長老の旅の行方を予見し彼の門弟にインドで世話を受けるであろうという言葉であろう⁶⁴。

それと比べることができるのは西のタラブルスを重要な舞台の一つとした著者に関わる2人の人物の話であろう。また、これらの人物に関わる情報が継続的に多くのルートから伝えられていることが窺われるのは、この事件が異様であったことで人々の注意を引いたためであったことは勿論、著者の社会的な地位が比較的高かったため、各地の探索の結果が報告されていたと考えられる。またそのように叙述することで旅をまとまりのある「話」と構成した著者の試みと考えることもできよう。しかし職名などマグリブの現地で使われている用語を正確に伝えていることから、その旅の内容を疑うことは出来ない。彼の旅の記述は、当時の西地中海のイスラム王朝支配下の諸都市の状況の一端を具体的に示す記述であることが改めて確認できよう。

（本稿は大阪大学世界言語センター 特別教育研究経費『民族紛争の背景に関する地政学的研究』プロジェクトの研究成果の一部である）

1. フェルナン・ブローデル『地中海』全5巻、浜名優美訳、藤原書店、1991－95年。
2. 家島彦一『イブン・バットゥータの世界大旅行－14世紀イスラームの時空を生きる』平凡社、2003年、pp. 67－8.
3. 写本は‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī al-Malaṭī, al-Rawḍ al-Bāsim fī Ḥawāḍith al-Umr wa-al-Tarājīm, Vatican Arabo 728, 729, (以下 al-Rawḍ と略して引用する)；イブン・ジュバイル『旅行記』、藤本勝次・池田修監訳、関西大学出版部、1992年、同『イブン・ジュバイルの旅行記』、講談社学術文庫、2009年；イブン・バットゥータ、イブン・ジュザイイ編『大旅行記』（東洋文庫）家島彦一訳注、全8巻、平凡社、1996－2002年。
4. この二人の人物については同じ写本からの情報と他の資料から検討した。これまで史書全体の検討、特に著者の父についての記事の検討、著者の別の写本の研究、史書の特徴について英文で増補したものを発表した。拙稿『マムルーク朝時代15世紀末の一史書の成立過程について－‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī のイスラム暦848年／西暦1444年4月20日から1445年4月8日の叙述の検討を通じて－』『東洋史研究』59－3（平成12年）

- pp.34-81、「我が父ハリール・ブヌ・シャーヒン『Abd al-Bāsīt al-Hanafī』の記述の比較研究」『西南アジア研究』47（1997年）pp.53-73、「マムルーク朝時代末期の歴史家をめぐる知的環境-アブドル=バースィトにとって Dhayl を書くということと自伝的記述について-」『関西アラブ・イスラム研究』2（2002年）pp.51-51、「An Analysis of ‘Abd al- Bāsīt al- Hanafī al-Malaṭī’s Description of the Year 848: On the Process of Writing History in the Late Fifteenth Century”, *Mamluk Studies Review*, X(1),(The University of Chicago), 2006, pp.29-54
5. 現在のレバノンの港町トリポリのこと。本稿の後半に見られるトリポリは、アラビア語では西のトリポリ（*Tarābulus al-Gharb*）と言われる現在はリビア領にあるトリポリである。
6. ‘Abd al-Bāsīt, *Nayl al-Amal fi Dhayl al-Duwal*, vol.1（Bayrūt,2002）,p.35 において校訂者タドムリーはその前にチュニスからバージャに行く前にトレムセンに一度目の訪問を果たし、この部分は二度目とするが、後述するように、これは誤りと考える。従ってこのときが一度目の訪問である。
7. この地名は、モンゴルのオイラートが移住させられたことからつけられた名前である。
8. *al-Rawḍ*.vol.3,fol.106a
9. *al-Rawḍ*.vol.2,fol.43a
10. *al-Rawḍ*.vol.2,fols.69a-b
11. *al-Rawḍ*.vol.3,fol.138a
12. *al-Rawḍ*.vol.2,fol.68b
13. *al-Rawḍ*.vol.1,fol.97a
14. *al-Rawḍ*.vol.3,fols.39,44
15. *al-Rawḍ*.vol.2,fol.6b
16. *al-Rawḍ*.vol.2,fols.10b,11a
17. すなわちラマダーン月（イスラム暦IX月）の翌月シャッワール月初め
18. *al-Rawḍ*.vol.2,fols.35b,39a
19. *al-Rawḍ*.vol.2,fol.40a
20. *al-Rawḍ*.vol.2,fol.42a
21. *al-Rawḍ*.vol.2,fol.42b
22. *al-Rawḍ*.vol.2,fol.56b
23. ハフス朝スルターン ‘Uthmān b. Muḥammad al-Manṣūr（在位 839 / 1435 - 893 / 1488 年）（Bosworth,C.E.,*The New Islamic Dynasties*,Edinburgh,1996,p.45.）
24. 後にハフス朝スルターン Muḥammad al-Mas‘ūd（在位 893 / 1488 - 894 / 1489 年）（Bosworth,C.E.,*The New Islamic Dynasties*, Edinburgh, 1996,p.45.）
25. *al-Rawḍ*.vol.2,fols.72b-73b
26. *al-Rawḍ*.vol.2,fol.52a
27. *al-Rawḍ*.vol.2,fol.52a
28. *al-Rawḍ*.vol.2,fols.52a,b
29. *al-Rawḍ*.vol.2,vol.54a
30. ハフス朝スルターン Abū Fāris al-Mutawakkil（在位 796 / 1394 - 837 / 1434 年）（Bosworth,C.E.,*The New Islamic Dynasties*, Edinburgh, 1996,p.45.）
31. ハフス朝スルターン Abū ‘Abdallāh al-Muntaṣir（在位 837 / 1434 - 839 / 1435 年）（Bosworth,C.E.,*The New Islamic Dynasties*, Edinburgh, 1996, p.45.）

32. al-Rawḍ.vol.2,fol.55b

33. イブン・ハルドゥーン著、森本公誠訳『歴史序説』（岩波文庫）全4冊、岩波書店、2001年

34. al-Rawḍ.vol.2,fol.56a

35. al-Rawḍ.vol.2,fol.56a

36. al-Rawḍ.vol.2,fol.74a

37. al-Rawḍ.vol.2,fol.75b

38. al-Rawḍ.vol.2,fol.76b

39. al-Rawḍ.vol.2,fol.77b

40. al-Rawḍ.vol.2,fol.79a

41. ‘Abd al-Bāsit, *Nayl al-Amal fi Dhayl al-Duwal*, vol.1(Bayrūt, 2002),p.35 において校訂者タドムーリーは、この部分を「トレムセンを過ぎて」と読み、一回目の訪問の後と見なしているが、日程的にも無理があり、写本の不注意な書き方からの誤解と考える。

42. al-Rawḍ.vol.2,fol.79b

43. al-Rawḍ.vol.2,fols.79b-80a

44. al-Rawḍ.vol.3,fols.91b-92a

45. al-Rawḍ.vol.3,fol.94b

46. アルモハド朝の財務官の名称を起源として、後にハフス朝においても使われ、ここでアブド・アル＝ワーディド朝においも使われていることが確認できる。

47. al-Rawḍ.vol.3,fols.97b-98a

48. al-Rawḍ.vol.3,fol.100a

49. Bosworth,C.E., *The New Islamic Dynasties*, Edinburgh,1996,pp.41-49 ;E.de Zambaur, *Manuel de Genealogie et de Chronologie pour l'Histoire de l'Islam*,Osnabrück,1976,(rep.of Hannover,1927),pp.74-80

50. al-Rawḍ.vol.3,fol.109a

51. al-Rawḍ.vol.3,fol.111b

52. al-Rawḍ.vol.3,fol.111b

53. al-Rawḍ.vol.3,fols.112b,113a

54. E.de Zambaur, *Manuel de Genealogie et de Chronologie pour l'Histoire de l'Islam*,Osnabrück, 1976,(rep.of Hannover,1927),pp.58-9 では、Abū-l-Ḥasan ‘Alī i. Sa’d ; Bosworth,C.E.,*The New Islamic Dynasties*,Edinburgh,1996,p.22 でも同名、西洋史料においては Muley Hācen とともに記す。

55. al-Rawḍ.vol.3,fol.113a

56. al-Rawḍ.vol.3,fols.113b,114a

57. al-Rawḍ.vol.2,fol.74b

58. al-Rawḍ.vol.3,fol.115a

59. al-Rawḍ.vol.3,fol.115b

60. al-Rawḍ.vol.3,fols.129b,130a

61. al-Rawḍ.vol.3,fol.132a

62. al-Rawḍ.vol.3,fols.132b-133b

63. al-Rawḍ.vol.3,fol.135b

64. 家島彦一『イブン・バットゥータの世界大旅行—14世紀イスラームの時空を生きる』

15世紀後半西地中海の都市社会

平凡社、2003年、pp.115－8.

